

# 養護教諭養成課程に在籍する学生と その親が持つ老人観に関する研究

梶岡多恵子\*, 石田妙美, 木村貴代子, 佐藤祐造\*

Cognition for The Elderly in Students and Their Parents  
in School Nurse Teacher Course

Taeko Kajioka\*, Taemi Ishida, Kiyoko Kimura and Yuzo Sato\*

## I. はじめに

昨今の少子化現象に伴う学校数の減少は教員採用人数にも影響を及ぼし<sup>1)</sup>, 1校に約1名という養護教諭の採用状況もかなり厳しいものになっている。一方, わが国において急速なスピードで訪れた高齢化は, 21世紀には5人に1人が65才以上となる『超高齢社会』を迎えると言われている。また, 平成12年度から実施された介護保健法の施行により, 老人介護・老人福祉の現場ではマンパワーの確保が問題となっている。このような現状のもと養護教諭養成課程で育成された学生の中にも老人介護・老人福祉の現場に出ていく者が年々増加している。本学もその例外ではなく, 毎年数名の学生が老人介護や福祉の現場に就職している。学生が老人に対してどのようなイメージを持っているかを明らかにすることは, 就職時の指導の際にも有用であると考えられる。

これまでの調査によると<sup>2)3)</sup>, 若者がもつ老人のイメージは否定的・消極的な側面が強くクローズアップされていることが報告されている。しかしその一方で, 幼稚園教諭を対象とした調査では「老人のことが好きである」と答えている者が多く, 人生経験豊かであることを長所として認めているなど, 老人に対して好意的態度を持っていることも明らかにされている<sup>4)</sup>。さらに宮崎らは老人に関する若者の意識構造を明らかにするために, 老人との同居経験や老人問題に対する関心などを基軸として分析を行ったが, 老人に対する意識を規定するほどの明確な結び付きは見られなかったことを報告している<sup>5)</sup>。

---

\* 名古屋大学総合保健体育科学センター

若者の老人に対する意識を規定する要因の一つとして、養育者である親がもつ老人観があげられる。しかし、これまでの研究において、子とその親がもつ老人観を同時期に調査した研究はほとんど見られない。そこで本研究では養護教諭養成課程に在籍する学生とその親がもつ老人観について検討を行ったので報告する。

## II. 対象および方法

**対象：**平成10年4月に東海学園女子短期大学・養護教諭養成課程に入学した学生55名とその親55名の計110名である。

**調査方法：**自記入式アンケートを用いた。アンケートは回答者の性別、年齢、祖父母との同居経験などを含む基本属性の部分と想定する老人の年齢・性別、老人に対するイメージ、老人への関わりについての設問項目からなる。

老人に対するイメージをとらえる方法の一つとして Osgood CE が考案した Semantic Differential 法<sup>6)</sup> (以下SD法と略す)がある。

SD法は情緒的意味を測定する技法であり、連想法と尺度評定法を結合させている。すなわち幾つかの相反する形容詞を対語にして多段階尺度を作り、それを回答者に評価させることにより意味の性質と強度を測定する方法である。本研究ではSD法に用いられる形容詞を対語にせず、表1にあるように72項目の形容詞を列挙し、それぞれについて1.「非常に思う」2.「かなり思う」3.「やや思う」4.「思わない」

5.「まったく思わない」という5段階による評価を行った。また、老人との関わりについては、10項目の内容をあげて同じく5段階による評価を行った。アンケートは冬期休暇の帰省の際に配布し、自宅で本人と保護者の両方が記入したものを1月に提出させた。

表-1 老人に対するイメージ・72項目の形容詞

1. 優れた	37. 依存的
2. 有能な	38. 受動的
3. 高尚な	39. 小さい
4. 賢い	40. 保守的
5. 立派な	41. 満たされた
6. あたたかい	42. バラ色
7. きれい	43. 幸福
8. きちんとした	44. 明るい
9. 魅力のある	45. うれしい
10. 劣っている	46. 満足
11. 無能な	47. からっぽ
12. 低俗な	48. 灰色
13. 愚かな	49. 不幸
14. 貧弱な	50. 暗い
15. つめたい	51. 悲しい
16. きたない	52. 不満
17. だらしない	53. 客観的
18. 魅力のない	54. 素直な
19. 動的	55. 理性的
20. 忙しそう	56. 同調
21. 生産的	57. 主観的
22. たくましい	58. 強情な
23. 速い	59. 感情的
24. 鋭い	60. 反ばつ
25. 強い	61. 優しい
26. 自立的	62. へりくだった
27. 能動的	63. 愛らしい
28. 大きい	64. 厳しい
29. 進歩的	65. いばつた
30. 静的	66. にくらしい
31. 暇そう	67. 積極的
32. 非生産的	68. 開放的
33. 弱々しい	69. 外向的
34. 遅い	70. 消極的
35. 鈍い	71. 閉鎖的
36. 弱い	72. 内向的

### Ⅲ. 結 果

#### 1) 対象者の基本的属性

表2に示すように、学生の平均年齢は18.7歳、祖父母との同居経験者は32名(58%)で平均同居年数は15.1年であった。一方、親の回答者は全て母親で、平均年齢46.1歳(年齢幅:40歳~56歳)、40名(72%)が祖父母との同居経験者で平均同居年数は18.8年であった。同居の有無による親の平均年齢に差はなかった(同居経験有り46.2歳、同居経験無し45.8歳)。

表-2 対象者の基本的属性

	平均(標準偏差)	
	学生	親
数(人)	55	55
年齢(歳)	18.7(0.4)	46.1(3.2)
同居経験あり(人)	32	40
同居年数(年)	15.1(6.1)	18.8(10.0)
同居経験なし(人)	23	15

#### 2) 回答者が想定する老人の年齢と性別

アンケート回答時に想定した老人の年齢区分を5歳刻みで選択させた。学生においては、想定した老人の年齢を65歳未満と回答している者は1名のみであり、残り54名の者は65歳以上の老人を想定していた。また、90歳~94歳、95歳以上という回答はなかった。回答頻度が多かったのは70歳~74歳が26名(47%)、65歳~69歳が15名(27%)であった。性別では36名(65%)の者が女性の老人、残り19名(35%)が男性の老人を想定していた。一方、親の方は65歳未満の老人を想定している者はなく、全員が65歳以上を想定していた。親の回答頻度が最も多かったのは学生と同じく70歳~74歳であった(26名、47%)。次に頻度が多かったのは75歳~79歳であった(12名、22%)。また、学生と同じく90歳~94歳、95歳以上という回答はなかった。性別では子と同じく36名(65%)が女性の老人を、残り19名(35%)が男性の老人を想定していた。

#### 3) 学生と親の老人に対するイメージの相違

老人に対するイメージの評価は5段階であり、「3」はその形容詞が示すイメージについて『やや思う』という評価となる。それぞれの形容詞に与えられた評価の平均値からみると、2.9以下はその形容詞が示すイメージを『思う』という肯定的方向でとらえており、逆に4.0以上は『思わない』と否定的方向でとらえていることになる。表3は評価の平均値が2.9以下の形容詞と4.0以上の形容詞をあげた。学生についてみると、ポジティブなイメージである「賢い」「立派」「あたたかい」「きちんとした」「優しい」とネガティブなイメージである「静的」「遅い」「鈍い」「弱い」を『思う』という肯定的方向でとらえている。また、「速い」「低俗」「愚か」「冷たい」「不幸」「憎らしい」というイメージについては『思わない』という否定的方向でとらえている。一方、親の方はポジティブなイメージである「賢い」「立派」「あたたかい」「優しい」とネガティブなイメージである「遅い」を『思う』という肯定的方向でとらえ

ている。また「愚か」「冷たい」というイメージについては『思わない』という否定的方向でとらえている。なお今回、老人のイメージとしてあげられている「静的」という形容詞は「静か」というイメージを示すものではなく、活動的、躍動的といったポジティブなイメージを表わす「動的」に対比する形容詞であり、動きがない、活動的でないといった意味を持つ。これはSD法において、老人のネガティブなイメージとしてあげられている。

次に学生と親との間に有意差を認めた形容詞をプロフィールに表わしたのが図1である。「あたたかい」「きちんとした」「小さい」「静的」「弱々しい」という形容詞について、学生の

表-3 評価が2.9以下あるいは4.0以上であった形容詞

学生		親	
賢い	2.8	賢い	2.7
立派	2.7	立派	2.8
あたたかい	2.2	あたたかい	2.6
きちんとした	2.9	優しい	2.7
優しい	2.4	遅い	2.9
静的	2.9		
遅い	2.7		
鈍い	2.8		
弱い	2.7		
速い	4.1	愚か	4.0
低俗	4.0	冷たい	4.0
愚か	4.1		
冷たい	4.0		
不幸	4.1		
憎らしい	4.1		

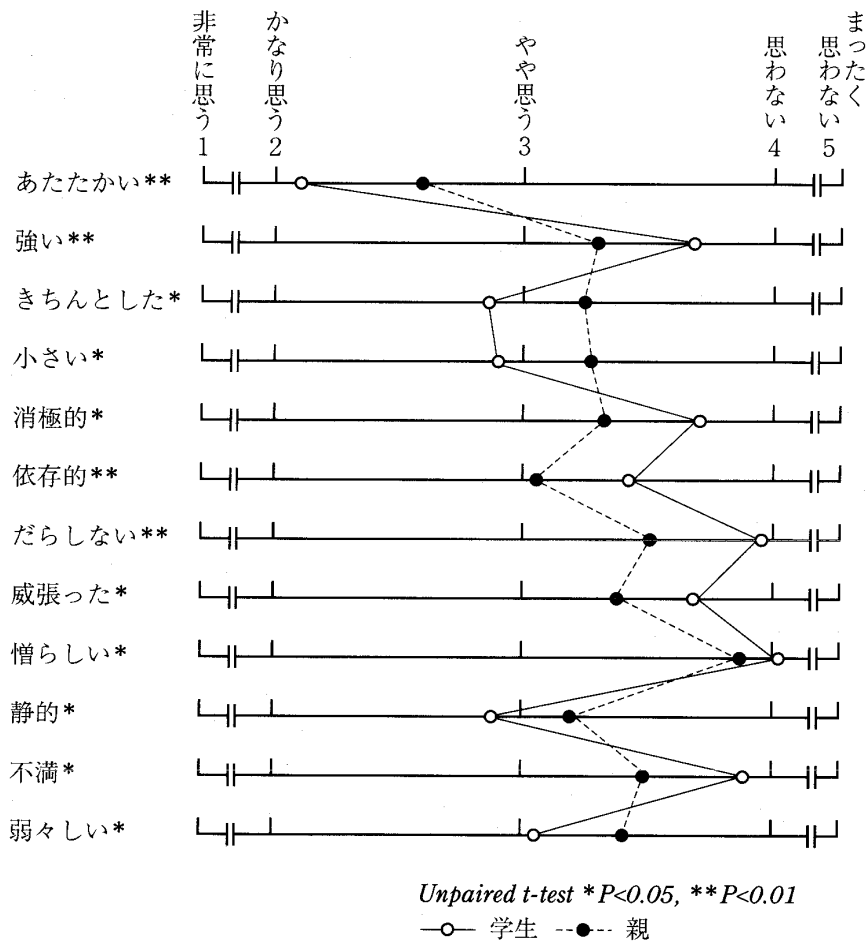


図-1 学生と親との間に有意差を認めた形容詞

方がより強く肯定的方向（『思う』）でとらえている。また、「強い」「消極的」「依存的」「だらしない」「威張った」「憎らしい」「不満」という形容詞については学生の方がより強く否定的方向（『思わない』）でとらえていることがわかる。特に「あたたかい」「強い」「依存的」「だらしない」という4項目については、学生と親の評価の差が大きいといえる。同居経験の有無によるイメージの相違においては（表4）、学生と親で異なった

表-4 同居の有無によるイメージに差を認めた形容詞

		満たされた	感情的	消極的
学生	同居有	3.6	2.7	3.9
	同居無	3.2	3.2	3.4
	P値	0.029	0.043	0.014
		幸福	悲しい	
親	同居有	3.1	3.9	
	同居無	3.6	3.4	
	P値	0.016	0.040	

*Unpaired t-test P<0.05*

形容詞があげられていた。学生では同居経験の有る者と無い者との間では「満たされた」「感情的」「消極的」という形容詞に有意差が見られ、親では「幸福」「悲しい」という形容詞に有意差が示された。

#### 4) 老人への関わりについての評価

老人への関わりについて5段階評価を行い、その平均値を示したものが図2である。「高齢者を身近な存在として感じる」「老人問題に関心がある」の2項目において学生と親との間に有意差が認められた。さらに統計的有意差は認めなかったものの、親の方が学生に比較すると「高齢者のケアに不安を感じている」ことがわかる。また学生・親ともに「高齢者から学ぶことは大切である」については『かなり思う』、「高齢者との人間関係で安心感を感じる」については『やや思う』という評価を示していた。

### Ⅲ. 考 察

養護教諭養成課程に在籍する学生とその親がもつ老人観を明らかにするために、老人に対するイメージおよび老人への関わりについてアンケート調査を実施した。学生は本校短大の2年生であり、親の大半は戦後生まれで、いわゆる団塊の世代とよばれる層である。今回の調査時に想定された老人の年齢は、学生の場合、65歳から74歳で全体の74%を占めており、ほとんどの者が60代後半から70代にかけての老人を想定している。これは男女大学生567名を対象として実施された調査<sup>7)</sup>とほぼ同じ結果であった。一方、親が想定する老人の年齢は学生よりも高く、70歳から79歳までが全体の69%を占めていた。親の場合、60歳代は自分自身の親の年齢層とオーバーラップするため、60歳代を老人とは想定しにくいのではないかと思われた。

次に学生と親の老人に対するイメージについてであるが、表3にあげた形容詞以外は評価の平均値が3.0から3.9の間で推移している。すなわち表3にあげた形容詞は学生と親が特に強く

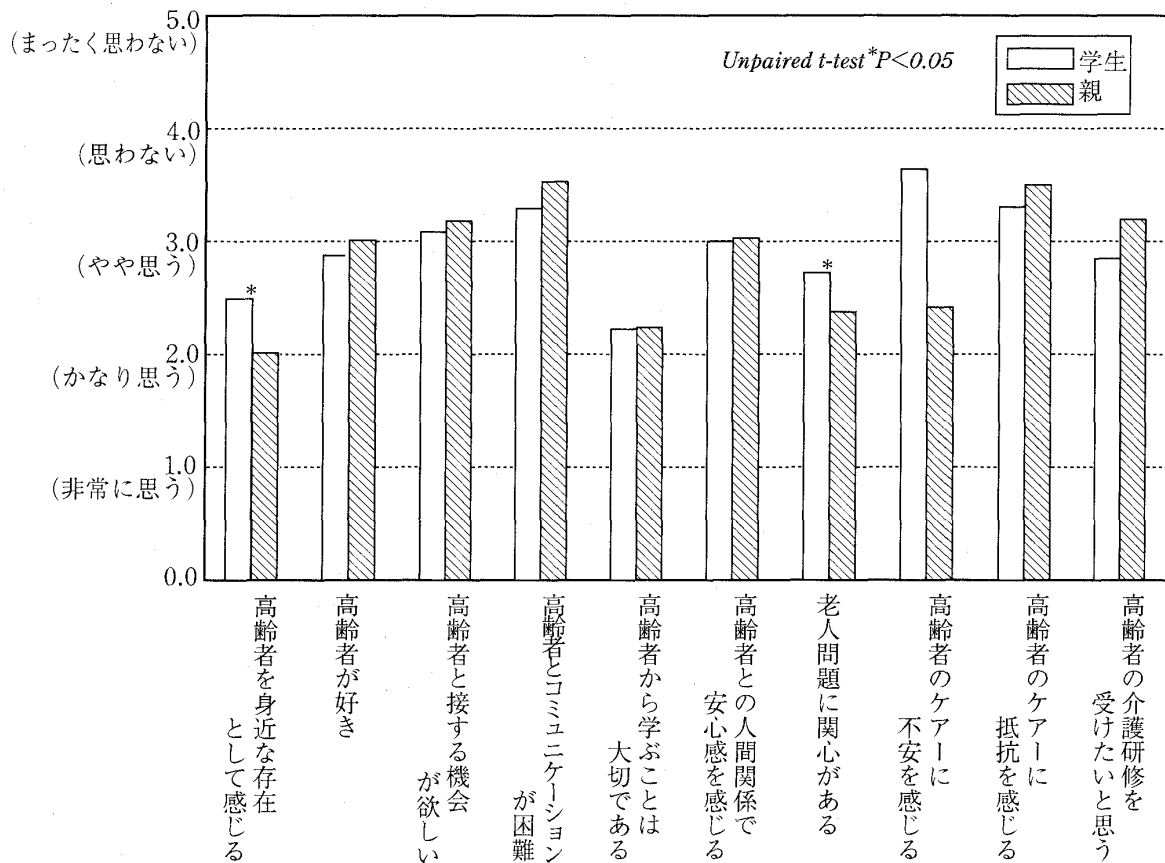


図-2 老人への関わりについての回答

イメージしている形容詞といえる。保坂らはこれまで数回にわたり大学生を対象としてSD法の形容詞を用いた老人に対するイメージ調査を実施している。1986年に実施した794名の大学生を対象とした調査では、老人に対して抱くポジティブなイメージとして「あたたかい」「優しい」を、ネガティブなイメージとして「弱い」「頑固」「消極的」をあげている<sup>8)</sup>。また東京都内およびその近郊にある7つの大学の男女を対象とした同様の調査では、ポジティブなイメージとして「あたたかい」「賢い」「静かな」「優しい」が、ネガティブなイメージとして「保守的」「地味な」「暇そう」「静的」「遅い」が強く示されたと報告している<sup>7)</sup>。本校の学生においてもポジティブなイメージとして「賢い」「立派」「あたたかい」「きちんとした」「優しい」という形容詞をあげていることから、「あたたかい」「優しい」という形容詞は多くの学生に共通する老人のポジティブなイメージだと考えられる。一方、ネガティブなイメージについてはこれまでの報告<sup>7)8)</sup>とは多少の相違がみられた。本校の学生は老人の身体的行動面の特徴である「静的」「遅い」「鈍い」「弱い」をネガティブなイメージとしてとらえている。SD法ではポジティブなイメージとしてあげられている「速い」という形容詞を『思わない』という否定的方向でとらえていることも同様に解釈できる。

親の場合についてみると、特に強くイメージされている形容詞の数は学生に比較すると少な

かった。ポジティブなイメージとしては学生と同様に「賢い」「立派」「あたたかい」「優しい」をあげているが、学生において見られた「きちんとした」という形容詞は見られなかった。「きちんとした」という形容詞は学生と親の間に有意差の見られたものの一つである。すなわち学生は老人に対して「きちんとした」というイメージを強く持つが、親の方は『やや思う』という評価である。また、これまでの若者対象とした調査においても<sup>2)3)7)8)</sup>老人に対するポジティブなイメージとして「きちんとした」というイメージはあげられていないため、本校学生の一つ特徴といえるかもしれない。また、ポジティブなイメージである「あたたかい」「優しい」という形容詞は親の方でもあげられていることから、この2つのイメージは年代に関係なく老人に対して強く持たれるイメージであることが示唆される。

さらに学生が『思わない』という否定的方向で強くとらえている形容詞としては「速い」「低俗」「愚か」「冷たい」「不幸」「憎らしい」の5項目があげられていた。先にあげた肯定的方向で評価しているポジティブな形容詞と対比していることがわかる。すなわち「賢い」というイメージは肯定的方向で強く評価されており、「愚か」というイメージは否定的方向で強く評価されている。同様に「立派」と「低俗」、「あたたかい」と「つめたい」、「鈍い」と「速い」も対比的に評価されている。このように対比的に評価されているイメージは評価者にとっては、より明確な強いイメージであると考えられる。一方、親では「愚か」と「つめたい」という形容詞のみが否定的方向（『思わない』）で評価されている。親は学生に比較すると肯定的であれ否定的であれ、より明確に強くイメージされている形容詞の数が少ない。この点については図1のプロフィールからも読みとれる。学生と親との間に有意差を認めた形容詞について、学生は評価3の『やや思う』を中心として左右に大きく動いている傾向がみられたが、親の場合は「あたたかい」と「憎らしい」という2つの形容詞を除いて、左右に大きく動いているものは少なかった。また親の場合、それぞれの形容詞に対する評価の標準偏差値が学生に比較すると大きい。すなわち親が老人に対してもつイメージは個人差が大きく、よって親全体としてみた場合は明確で強くイメージされる形容詞の数が少なくなったと推察される。また、同居経験の有無によって学生と親に共通のイメージが存在するのではないかと考えたが、今回の結果では学生と親に共通してあげられた形容詞はなかった。

最後に老人への関わりについて、親は学生よりも高齢者を身近な存在として感じており、老人問題に関心を持っていることがわかる。また高齢者のケアに不安を感じている傾向が学生よりも強かった。本研究の対象となった親の平均年齢は46歳である。人生を80年と考えると既に折り返しの40歳を過ぎていることから、親の年代ではこれからの老後に関心が強く、さらに自分自身の親が高齢になっていくことから老人ケアについても不安が大きいのではないかと考えられた。また学生と親がほぼ同じ評価点を示したものは「高齢者から学ぶことは大切である」「高齢者との人間関係で安心感を感じる」という項目であった。特に高齢者から学ぶことの大切さについては、学生も親も『かなり思う』と評価していることから、親の姿勢が子である

学生に反映されている可能性が大きいと考えられる。今後はさらに調査対象者数を増やし、病院実習後や就職した後に、老人に対するイメージがどのように変化するかという点について検討して行きたいと考える。

#### IV. ま と め

養護教諭養成課程に在籍する学生とその親に対してアンケート調査を実施した結果以下の点が明らかとなった。

- 1) 学生の想定する老人の年齢(65歳から74歳)に比較すると、親の想定する老人の年齢(70歳から79歳)は5歳程度高い年齢層であった。
- 2) 学生は老人に対して「賢い」「立派」「あたたかい」「きちんとした」「優しい」というポジティブなイメージをもつ反面、身体的行動面については「静的」「遅い」「鈍い」「弱い」というイメージを強くもち、ポジティブなイメージとしてあげられている「速い」という形容詞についても『思わない』という否定的方向で評価していた。また、本校学生の特徴的な点として、老人に対して「きちんとした」というイメージを強く持っていることがあげられた。
- 3) 「あたたかい」「優しい」というイメージは年代に関わらず、老人に対するポジティブなイメージとしてあげられていた。
- 4) 親が老人に対して持つイメージは学生と同様の傾向を示していたが、学生に比較するとより明確に強く持つイメージが少なく、これは個人差の大きいことが影響していると考えられた。
- 5) 親は高齢者を身近に感じ、老人問題に関心があり、また高齢者のケアに対して不安を感じている傾向が強かった。また「高齢者から学ぶことが大切である」という項目は学生、親ともに共通して『かなり思う』と評価しており、親の姿勢が子どもである学生に反映されている可能性が示唆された。

#### 参考文献

- 1) 国立大学協会「大学における教員養成」, 124-125, 1995
- 2) 守屋国光: 女子短大生の老年像, 目白学園女子短期大学研究紀要, 11: 83-60, 1974
- 3) 佐藤泰道, 長嶋紀一: 老化イメージ(4)大学生による老人のイメージ, 浴風会調査研究紀要, 60: 73-76, 1976
- 4) 安藤貞雄: 幼稚園教諭の老人観について, 盛岡短期大学研究報告, 25: 57-94, 1974
- 5) 宮崎昭夫, 久留島京子, 松田淳之助, 田路慧, 山本清洋: 老人問題に関する意識構造の研究(II), 岡山県立短期大学紀要, 20: 107-114, 1974
- 6) 岩下豊彦, SD法によるイメージの測定, 川島書店, 1983
- 7) 保坂久美子, 袖井孝子: 大学生の老人イメージ—SD法による分析—, 老年社会医学, 27: 22-33, 1989
- 8) 保坂久美子, 袖井孝子: 大学生の老人観, 老年社会医学, 8: 103-106, 1986